

都立 第五福竜丸展示館ニュース

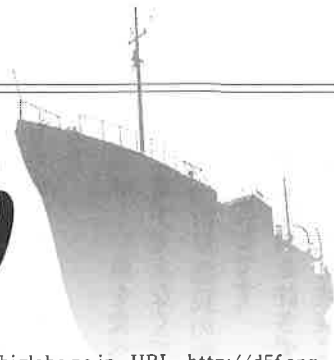
2013.03.01
No.374

(3・4月号)

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

福竜丸だより



五〇〇万人目の来館者となった練馬区立石神井西小学校六年生のみなさん。
(撮影・櫻写真館 石井透)



核のない未来へ

五〇〇万人の航海

一九七六年の展示館開館以来の通算来館者が五〇〇万人を超えました。

一月二五日前、社会科学見学で訪れた練馬区立石神井西小学校六年生（栢山久子校長）四七人全員が五〇〇万人目の来館者となりました。

川崎昭一郎代表理事より歓迎と感謝の挨拶の後、安田和也主任学芸員から、この船は水爆実験により被ばくしたのち、練習船に改造されたこと、廃船処分になってゴミの埋立地だった夢の島に放置されていたこと、多くの市民のとりくみで保存されたことなどの説明を受けました。この日は朝から小学校四校、中学校一校のほか、生涯学習やハイキングのグループなどで終日にぎわい、来館者が五〇〇万人を超えたことを寿ぎました。

石神井西小の生徒たちから後日感想文が届きました。

「よくがんばってマグロと船員

を連れて焼津港にもどってきたんですね。第五福竜丸が一度は廃船になったものの、沈みそうになっていた船を住民と東京都が助けたという話に感動しました」（明美）

「この船は平和をきずく大事な船なんだと思いました」（裕斗）
「この船を捨ててはいけいかなあと思いました。この船は水素爆弾の恐ろしさを世界につたえろとりのでなのかもしれせん」（知史）

「五〇〇万人」のニュースは朝日、東京、静岡新聞のほか共同通信配信で各紙で報道されました。ツイッターやフェイスブックなどでも話題になり、来館者アンケートには「わたしも五〇〇万人の人です」「ニュースを聞いて、どうしても行かなくてはと、思い、やってきました」と書かれています。

第五福竜丸はあらたなる航海にむけて舵をきります。

3・1ビキニ市民講演会開く ビキニのマグロからフクシマの魚へ 核・放射能と向き合う

第五福竜丸平和協会恒例の3・1ビキニ記念のつどいは、水口憲哉さん（人と魚と水の研究）を迎え、「ビキニのマグロ、フクシマの魚―おいしいサカナが食べたい」と題して講演いただきました。会には八〇人が参加、川崎昭一郎代表理事のあいさつにつづき、水口さんからスライドによる資料や図表を解説しながら熱のこもったお話がありました。（講演要旨、文責編集部）

美味しいサカナを
食べつつけるために

八年前まで東京海洋大学（水産大学）に三三年間勤めておりました。ビキニからチエルノブイリをはさんでフクシマに至るこの六〇年。魚を食べることと放射能汚染について私たち日本人がどのように考え対応してきたかを、あらためて考えてみたいと思います。

美味しい魚を食べ続けるためにまず考えなくてはならないのは「沿岸漁民の資源維持」ということです。

漁場破壊を許さず、乱獲をしない。漁場破壊には原発だ

けでなく埋め立てや汚染などいろいろなありますが、基本は発生源を絶つことです。三重や和歌山、高知、日本海側では京都から山口まで「原発を拒否し続けている漁村」があります。自ら学んで漁業を守り、生活と仕事の間を守るために漁民が反対して原発や核関連施設を作らせなかったところが全国に六〇カ所近くあるのです。ですからこうした「拒否しつづけている」漁民というのは、発生源となる原発を作らせなかったということとです。（パンフレット「原子力発電は温暖化防止の切り札ではない」より。発行・日本カトリック正義と平和協会



資料提供・水口

原発と漁業を考える際、漁民にとって一番わかりやすい

表1. マグロ類の放射能汚染の比較

	バショウカジキ	シロカジキ	クロカジキ	マカジキ	メカジキ	キハダマグロ	メバチマグロ	ビンナガマグロ	クロマグロ
1954年 廃棄率	12.4	0.1	2.4	0.4	0.04	0.7	0.2	0.1	0
1986年 Cs137 Bq/kg									2.7~*
2011年 セシウム Bq/kg									28

* 4.2×10⁶ 「まぐろと原発」参照

のは「温排水」です。「温排水」という表記を見ると電力会社は怒ります。一九七八年に福島第一原発付近の海でホッキ貝の調査を行った際、コバルト60やマンガン54が微量に検出されました。新聞も取り上げ、東京電力は「今、放射能を海に捨てないような設備を作っている」との談話を出しましたが、漁民たちは「濾し取ったものはどうするんだ」という疑問を抱きました。この時、国と電力会社は放射性廃棄物の海洋投棄を計画していたわけです。

マグロの放射能汚染

魚類の放射能汚染を魚種別に整理すると、福島第一原発事故で計測値が高かったのは沿岸魚、淡水魚で、マグロではクロマグロです。ビキニ事件の頃に深刻な被害の出たキハダ、メバチ、ビンナガなどは日本沿岸にはあまり来ないので、フクシマ由来の汚染は低かったということがわかりました。（表1）

また、マグロ類に関しては、ビキニ事件の一九五四年の調査で、一〇〇カウント以

上が廃棄されましたが、ほとんどの種類で廃棄率1%以下なのに対し、クロカジキ2.4%、とバショウカジキ12・4%という値が出ています。秋から冬にも三〇〇〇〜五〇〇〇カウントの汚染魚が獲れています。一二月に検査が打ち切られることの根拠は、「日本人が食べる量はたいしたことない」という理屈でした。そして翌年は検査をすることなく缶詰の原料として輸出されていました。（表2）

チエルノブイリの時にはフランス沖の大西洋クロマグロから2.7 Bq/kg（1キロ当たりのベクレル値）という数値が出ていますが、実は汚染の中心となる黒海やエーゲ海では測っておらず、もし測っていたら何万Bqとなった可能性があります。

ビキニの時にも、カツオについては全く測っていません。測っていれば、輸出産業の花型だったマグロよりも日本人の人がと食べていたカツオの方が危険だった可能性もあると思います。今の福島の記事を考えると、赤道から来た（3めんにつづく）

表2. 放射能測定数値の推移

		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
指定5港	5000c/m以上	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
	3000	—	—	2.8	—	5.0	8.3	2.8	3.0	—	1.2
	1000	—	—	2.8	—	15.0	8.3	5.6	1.5	1.3	2.4
	500	—	6.2	19.4	34.2	25.0	19.5	47.2	16.4	11.7	14.6
	100	—	93.8	25.0	31.6	15.0	25.0	26.8	24.6	24.6	23.2
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
指定5港以外	3000c/m以上	—	—	—	1.2	1.8	—	—	—	—	—
	1000	—	—	11.8	3.6	7.2	15.0	11.9	9.1	7.1	11.4
	500	—	—	15.7	15.6	21.4	7.5	21.4	21.8	15.5	28.5
	100	—	—	72.5	79.6	69.6	77.5	66.7	69.1	77.4	60.1
	計	—	—	100	100	100	100	100	100	100	100

註 民科【民主主義科学者協会】水産部会

(近藤康男編『水爆実験と日本漁業』)

盆前のカツオは平均2.5 Bq/kgでしたが、東北の沖まで行って戻ってきた「戻りカツオ」からは平均10 Bq/kgという値が出ます。このように具体的な回数と汚染源が分かればある程度の推測は可能です。そのことを考えると、一九五四年のカツオの汚染は深刻だったと思います。

測れば出る!?

福島事故では接岸しない

南太平洋から赤道海域を分布の中心とする三種のマグロについては10 Bq以下ですが、日本人が一番よく知っていて一番高価なクロマグロが平均28 Bqと一番高いのです。

が日本に対し示唆したようすし、「日本人は騒ぎすぎる」と言いながら輸入するマグロについては厳しい検査を要求していました。

海藻も語る放射能
海藻も同じです。三・一一以後二カ月ほど、私は福島はもちろん、茨城・千葉の今採れている海藻は食べない方がいいと言っていました。

子どもにはその10分の1の10 Bq/kg以下にした方がいいと思っています。
10 Bqなんて、マスクは書けません。みんな心配しているわけですが自分たちで判断する材料を誰も出してくれません。福島のアイナメ、ヒラメ、スズキは一年九か月を経て、値が下がってきてはいます。下がってはいるけれど100 Bqです。

実は今回のことがあるまでクロマグロは測られていないと発言してきましたが、水産庁の資料をみると二〇〇七年から計測されていました。これをみると、チェルノブイリ事故由来の汚染を調査しており1 Bq以下です。ただしこの資料は一般には公開されていません。知らせたくないのです。基本的にクロマグロの値に触れてほしくないし、測りたくないわけです。だから「どうなってるんだ？」と照会しても「とれない」と言い張っていたのですが、九月頃になってようやくこの数値が出てきました。

今の問題ですが、ビンナガは海流との関係でアメリカに到達する可能性は低い。それよりもクロマグロが行く可能性の方が大きいのです。水産庁が多額の経費をかけて「標識」をつけた個体のうち一〇個体がアメリカで捕獲されています。実際二〇一一年八月にカリフォルニア沖で釣り人に頼んで獲ったクロマグロから放射能が検出されたことが、アメリカの科学雑誌に発表されました(二〇一二年五月)。

常に遅れて、隠しようがなくなつたところで測る。測れば出るのです。一九七一年に福島第一原発でアカモク(海藻)を測ったのが、日本で原発からでた放射能の影響をみた最初です。敦賀でも海藻から放射能が出て大騒ぎになっています。このように、海藻はまず高い値がでます。ただしヨウ素131が中心なので、時間の経過でわからなくなってしまう。

福島県では自主的に出漁していません。世界的にも海の魚でのこのような被害については経験していません。昨暮れに福島の南北二県の魚から10 Bq/kgが検出された魚種を具体的に明らかにし、築地での出回り状況から「安心指数」を出しました。たとえば茨城のヒラメは計測値の月変化をみていくと一二月には下がると予測されるわけです。このようにとれた地点と魚種で具体的にみていくしかありません。

日本では当初、ビンナガしか計測されませんでした。これはアメリカではビンナガが一番食べられるためでツナ缶の原料になるので大変心配したのです。ちなみに福竜丸の被災の時は、測定値の「1分間に100カウント」もアメリカ

「回遊魚の検査を全国規模で実施すべきだ」という私のコメントが毎日新聞に載りました。ですから測って見ないことには分かりません。日本のクロマグロも、測れば計測される可能性は高いです。日本のクロマグロの調査はあまりにも数が少なすぎます。調べていないのと同じ状態です。

小さな子どもには10ベクレル以下をめざす
国は食品の基準値を500 Bq/kgに設定し、その後100 Bqにしました。しかし私は、小さな

ただわからないものもあり、マダラは茨城から北海道まで高い値が出ています。ホウボウは茨城から岩手で10 Bq (4めんにつづく)

(3めんからつづく)

より高いものが出ています。水産庁もマダラはわからないといっています。北海道では胆振など限られた地域、日本海側やオホーツク海側では測っても出てきません。そのため、そのようなことを考慮して計算しなおすと実際には安心指数が60くらいにはなりませんが、心配は心配です。

国が主張している100 Bq/kg以下よりも低いものを求める姿勢が重要なのであって、数値そのものに絶対の安全性があるわけではありません。低線量でも、子どもに汚染された食材を食べさせたくない心配するのは、親として当然のことです。そして本当は子どもだけではなく、誰もが食べなくてはならないように発生源を断つべきです。

チェルノブイリ事故で降ってきたものによって、日本のまわりの魚は0.5 Bqぐらいにはなっています。知らされていないから、ゼロだと信じたいでしょうが、測れば出てしまうのです。

「少なくとも小さな子どもには1 Bqでも食べさせたくない」と考えるのは親として当然です。鮭の切り身はだいたい100 gですが、それが1 Bqだとすると1 kgだと10 Bqになります。魚以外にも含めて食べ物、飲み物から合計で4〜5 Bq以下に抑えようというドイツの考え方があります。すると魚だけで1 Bqを摂るといろいろな食品との合計で10を超えてしまいます。

現在は、福島からのものを中心に出荷制限されていますから5 Bqを超えるということはないのですが、非常に厳しい数字です。

被曝する人びと

マーシャル諸島ではアメリカのさまざまな機関がロンゲラップなどの人びとについて食べ物や内部被曝について測っています。日本ではセシウムのことには触れてこなかったのですが、マーシャルではきちんと調べています。人体実験として続けてきた面も否定できませんが…。

一九八〇年代のはじめに、放射性廃棄物の海洋投棄の問題がおきたとき、マイクロネシアでの調査と講演に誘われま

したが、日本で「発生源」である科技庁などを放っておくわけにはいかないと、行きませんでした。その後『ノーといわれる日本』（日消連）で書いたものですが、日本が入漁料を払ってマグロ・カツオをとっている一方、太平洋の人たちは安いサバやイワシの缶詰を買って食べている、という関係があります。

核のゴミを南太平洋に捨てようとしたとき、太平洋の人たちは「あなたたちが食べるマグロやカツオが汚染するんじゃないのか」と言うわけです。宝の海が駄目になると、日本にそれを知らせにきました。海と魚を気遣う気持が感じられます。ところが、当時の中曽根首相は、南太平洋を歴訪するのには、核のゴミを手土産には行けないということとで海洋投棄を中止しましたが、その核のゴミが六ヶ所所の再処理工場に運ばれたわけです。

被曝と向き合っていくこと

マグロと放射能について核利用（核兵器と原発）とマグロを食べることにをめぐって、日本とアメリカにおける

それぞれの事情を、みてきました。一九五四年のビキニ事件による被曝の広がりについては、西脇 安（大阪市立医大）さんが消費者の立場に立ち被曝線量について厳しい議論と行動をされています。また物理学者の武谷三男さんは、福竜丸被災の後、八月初旬に『死の灰』（岩波新書）にて乗組員の被曝やマグロ汚染、環境問題など専門家へのインタビューをまとめています。地球化学者の三宅泰雄さんは、放射能の雨・環境汚染ととりくみ鋭い警句を発し、今につづく観測体制を気象研究所に作りました。

五四年一二月のマグロ検査の中止、チェルノブイリ原発事故の際の輸入食品問題そして福島第一原発事故による放射能汚染で全国規模で、魚が食べられなくなるのではないかとという心配をもとに、熟慮された10 Bq/kgという目安と安心係数。これらを通じて低線量の内部被曝と漁業生産への影響について魚の放射能汚染に関して、どれだけ深く考えるかが問われていると思います。

そのような状況の中で、海と魚にかかわる研究者が、核利用の問題をどのように位置づけ、消費者であり被害者である多くの人びとについてどのように考え感ずるかによって、核を利用し管理する者たちの追従者が生じてくる。それらの追従者が常に人びとを困らせ怒らせる。ビキニマグロ事件は、そのことをわからせてくれたのです。

(みずぐち けんや/東京海洋大学名誉教授、農学博士、人と魚と水の関係学、七〇年より原発や環境問題で漁村をめぐり漁民を支援)

【水口さんの最近の本】

- ・『これからどうなる海と大地く海の放射能に立ち向かう』七つ森書館
- ・『食品の放射能汚染—0ベクレルの食卓をめざす—マニユアル』宝島社
- ・『淡水魚の放射能く川と湖の魚たちがいま何が起きているのか』フライの雑誌社
- * 『マグロと放射能』についての新著を準備中です。



第五福竜丸、大石又七、福島

——ひとりずつのモニユメントの

到来のために

新井 卓

二〇一二年二月二日、未明に起き出して銀板を磨きはじめた。戸外は闇に浸され、大気は氷点近くまで冷えている。凍えながら手を動かしはじめ、次第に汗ばんで三枚目を磨き終えた頃、東の空があかね色に輝き出した。

朝九時、撮影機材を積み込み世田谷へ車を走らせた。第五福竜丸元乗組員・大石又七

さんはいま、長男長女の家を往き来しながら療養をつづけている。分厚いジャケットに暖かそうなマフラーを巻いて、にこやかに団地の入り口に現れた大石さんは、ずいぶんと体重を落とされたようだった。

国道から首都高に入るまで、何台かの選挙カーが路傍に停まっていた。候補者の言葉は聞き取れず、ひらひらと虚空に向かって振られる白い手袋の群れだけが、視界の端をまぶしくしていた。年末の道はどこも混

んでいて、第五福竜丸展示館に着くころにはもう日が高く昇っていた。はじめ展示館の前で、それからかつて第五福竜丸が棄てられていたという浅瀬を臨んで、大石さんにポーズをお願いする。風が止み、空が冴え冴えと晴れ渡っていた。一〇秒の露光のあいだ、皆が息をのんで立ち尽くしていた。

*

私は、銀板写真（ダゲレオタイプ）と呼ばれる技法をつかって、写真を撮りつづけている。鏡のように透きとおった銀の表面に直接画像をうつす銀板写真は、複製も引き伸ばしもできない一枚かぎりの写真である。

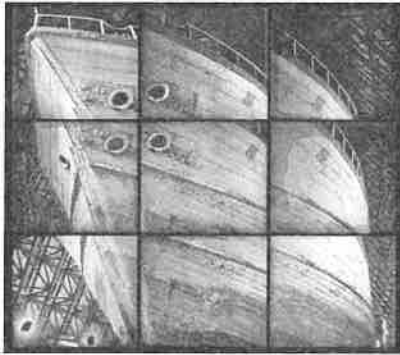
銀板写真が生まれる以前、人類はうつろいゆく映像を定着するすべを持たなかった。写真ははじめ、大切な人々や自分自身の似姿を遺すために欲望された。極めて精緻な描写力をも

つ銀板写真は、銀の堅牢な物質感と合わさって、写された人間の身体の一部とみなされ、何重にも保護された蓋付きのケースに収められていた。

銀板写真の中の市井のひとびとの眼差しからは、自らの映像が永遠に失われてしまうことへの抵抗の音が聞こえてくる。時間の奔流のなかで、ある一人の人の存在が忘れ去られてしまうこと。それはその人がどこにも存在しなかったこと、はじめからいなかったことと実は同義である。写真とは、忘却と消滅に抵抗するための記憶装置、ひとりずつの小さなモニユメントだった。

*

大石さんの声をはじめ聴



新井作品二点を含む
ポストカードセット発行

いたのは、東日本大震災直前の二〇一一年二月二五日、夢の島でのことだった。大石さんの言葉はやさしく、力強く、直進する矢のようにわたしたちに向かつて、まっすぐに投げかけられていた。かれは怒っていた。第五福竜丸の最後の航海に乗り組んだ二三名のうち、七名の方々が健在とのことである。そのなかで大石さんは特別な意志をもって、各地を旅しながら、第五福竜丸事件や核の問題についてすすんで発言をつづけてきたと知った。

『ビキニ事件の真実』（みすず書房）を読んだ。穏やかな風貌とどこか相容れないような「おれ」という強い一人称を通して語られる物語に、目の覚めるような驚きをおぼえた。

*

震災以降、気にかかっていることがある。それは人々が大きな主語を使って、たとえば、日本人は、経済界は、というふうに語りはじめたことだ。大飯原発の再稼働が報じられたとき、テレビのインタビュに応じた人は「福島の人には申し訳ないけれど、日本経済を考えると再稼働はやむを得ない」と語

っていた。福島の人とはだれか。かれは、名前も顔もある一人のひとの目を見て、同じように語る事ができただろうか。わたしたちは本当に日本人を、日本経済を、代弁する必要があるのだろうか。大きな主語で語り始めるとき、そこに断絶が生まれるのではないか。

*

民俗学者の折口信夫は、ものがたりの起源は霊（モノ）語りであると考えていた。死者、すなわち過去からの消えゆく言葉を、語り部が一人称で伝えることが物語の原体験ということだ。目の前のひとが一人称で語り始めるとき、わたしたちは直接そのひとと対峙し、同じ時空を生きようとする。それはたぶん、銀板写真に写された人と視線を交わすことに似ている。

今ふたたび、大石さんの声を聞くことができるのは幸いである。第五福竜丸のかすかな声、福島からの遠い声を記憶するために、私たちはいつまでも一人称に留まりつづけてはならない。ひとりずつで、立ち上がるために。

（あらい たかし／写真家）

人びとの目からみた水爆実験被害

評書
中原聖乃著
『放射能難民から生活圏再生へ』
法律文化社

米国による水爆実験の「死の灰」を第五福竜丸の乗組員と同時にあびせられたマーシャル諸島ロンゲラップ島の人びとが体験させられた避難と人体実験、隔離生活、帰還と残留放射能による再度の被ばく、自主的な移動と流浪などの苦難の歴史は、これまでに多数のジャーナリストによって伝えられてきた。いま、人びとが直面している「安全」とされる故郷の島への帰還についてもまた同様である。

しかし、ロンゲラップ島の人びとの苦難の歴史、現在の帰還などについての報道は、主に米国の資料を使い、水爆



実験の放射線被ばくによる人体への影響など米国による核被害の全体像を伝えることを中心とされてきた。

本書は、これまで伝えられてきたジャーナリストによる取材の視点とはまったく異なり、水爆実験被害をロンゲラップ島、マーシャル諸島の人びと自身の目と暮らしから見たことの調査報告書である。

文化人類学、平和学を専門とする著者は、マーシャル諸島の人びと、ロンゲラップ島の人びとの暮らしの実像を知ることからはじめ、水爆実験による被害者個人の体験と反応、暮らしとコミュニティへの影響、被害に対するマーシャル諸島全体の伝統的な社会システムに対する影響など人びとが実感している被害を詳細に描いている。いま、ロンゲラップ島の人

びとが決断をせまられている「放射能が残る故郷の島に帰るか、他人の島に住み続けるか」の選択については、自分の土地を持つことの重要性を理解しながらも、人びとは故郷の島への帰還にこだわらず、故郷の島へは時々訪ねればよいという柔軟な姿勢がみられるとしている。それは、珊瑚礁の島という厳しい生存環境の下で暮らし続けてきた人びとの生き方、故郷の島だけでなく他のいくつかの島に居住地をもうけてリスクを分散して暮らしてきたマーシャル諸島の人びとの生存のため

の知恵、コミュニティを維持、再生する方法であるという。東京電力福島第一原発事故による避難生活をしている福島の人びとに対しては、故郷に残る人びとと故郷の地との絆を持ち続けることが生活の再生に重要であるとしている。

本書は、あちこちに著者の人びとによせる優しいまなざしを感じられ、マーシャル諸島の人びとと核被害について考える新たな視点を提供してくれる。

(評者 豊崎博光／フォトジャーナリスト)

紹介 加藤一夫著

『やいづ平和学入門』論創社

本書はビキニ市民ネット焼津代表である著者が執筆・講演のなかで提言しつづけてきた「やいづ平和学」の集大成である。

第五福竜丸の母港、静岡県焼津市で二〇〇一年から著者が始めた「やいづ平和学」の受講生を中心に結成された「ビキニ市民ネット焼津」（以下市民ネット）は、関係者の

聞き取りをはじめ、映画上映、ライブ、アート展、スタディツアーなど多彩な活動を展開してきた。

二〇一〇年に創設され、第五福竜丸平和協会が第一回受賞者となった焼津平和賞は市民ネットによる提唱により創設されたものだという。同賞は沖縄平和賞、自由都市・境平和貢献賞と並ぶ自治体主



宰のユニークな賞で、第二回には高知県の幡多高校生ゼミナール、第三回にはビキニ水爆被災事件静岡県調査研究会が選ばれている。

市民ネットのとりくみについては本書と同時期に出版された、市民ネット・かまぼこ屋根の会編著『ヒロシマ・ナガサキ・ビキニをつなぐ』焼津流・平和の作り方Ⅱ（社会評論社）にも詳しい。平和のかたちとはなにか、地域における文化の取り組みとはなにかを問いかける。なお同書では第五福竜丸からはやぶさ丸への改造に関して「被爆時のものは骨組みだけ」と記載されているが、竜骨・肋骨・船首船尾、舵柱等の「骨組み」に加え、外板（一部新替）、などは残されており、機関室、操舵室・漁倉の一部など基本構造は漁船時代のままである。（編集部）

連載⑩

晴れた日に
雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

震災・原発事故を「理由」に中止になり、あの日電話で話したのが最後になりました。

*

計報を伝える各紙は、いずれも代表作の一つとして「ナガサキ」にふれていました。東松さんの写真集『11時02分 Nagasaki』が発行されるのは一九六六年ですが、その原型となったのは、原水爆禁止日本協議会が一九六一年に海外向けに発行した写真集『Hiroshima Nagasaki document1961』（「ドキュメント1961」）です。

年明け早々計報が伝えられました。写真家の東松照明さんが昨年一二月一四日に亡くなったという知らせでした。憂鬱なままに迎えていた年の初め、言いようもない哀しみが重なりました。

沖繩に居を移していた東松さんと電話で話したのは二〇一一年の二月でした。その年の四月から開かれることになっていた目黒区美術館の企画展「原爆を視る—1945-1970」のワークショップ出席の機会にお会いできるのが楽しみですなどと話し「体を大事にしようね」と言葉を交わしたのでした。ところが目黒区美術館の企画展は、3・11の



この写真集『ドキュメント1961』刊行に至る経過は次のようなものでした。六〇年の第六回原水爆禁止世界大会は、原爆被害の実相を海外に知らせるための写真集の制作を「勧告」する決議を採択

します。日本原水協に編集委員会が組織されますが、そのメンバーに特別編集委員として写真評論家の重森弘滝、伊藤知巳氏に加わり、制作実務は「情報宣伝技術グループ」（連載⑮など参照）が担うことになるのです。

*

当初、編集委員会、主に運動関係者の意向では、被爆写真の集大成のようなものが考えられていました。当然の主張でした。これに対し制作グループの論議は、それらの意見を勘案しつつも、この写真集刊行の時点、つまり被爆一六年の被爆者の実情と実態をどう取り込むか、取り込めるかに力点がありました。重森、伊藤両氏が強く主張しました。両氏の視野には、五八年に刊行された土門拳氏の写真集『ヒロシマ』があったと思います。写真集『ヒロシマ』が、写真界だけでなく、広く社会に与えた影響は大きなものがありました。収録された写真は、被爆一三年の、いまに「生きているヒロシマ」の現実を衝撃的に人びとの前に引き戻して見せたの

です。重森、伊藤両氏にはこの『ヒロシマ』につづく「ナガサキ」の記録への願望もかかっていたと思います。「ヒロシマ」は土門が撮った、「ナガサキ」も撮れないか。事実、論議のなかで幾度もこのことへの言及がありました。こうした経過を経て、一九六一年の時点で「長崎を撮り下ろした」写真を軸に写真集の編集を進めることになるのです。

*

撮影を誰に依頼するか、複数の写真家が挙げられました。結果が示すように、東松照明さんに依頼することになります。東松さんと決めたときの記憶が残っています。「東松が身軽でいい」伊藤さんが議論を締めくくるようにこう言ったのです。これで決まりました。東松さんがこんな風に語ったことがあります。

「私は岩波写真文庫の仕事をしていたことがあります。岩波書店は神田神保町、近くに「カメラ」の編集室があった（伊藤さんの職場）、親しくしていました。彼がVIVO（川田喜久治、細江英公、奈良原一高氏など六人のセル

フ・エージェンシー）に来て、私に撮ってほしいと依頼されたのです。原水協の担当者は山村茂雄、会いに行こうということになったのです」

*

東松さんが「長崎」を撮影したのは一九六一年二月の上旬です。去る二月一六日の朝日新聞夕刊「惜別」に浦川さん母子のことが記されていますが、私たちが訪ねたときは、母子を包み込むように白い梅が咲いていました。

「原水協の人に案内されて被爆者の家々を訪ねたとき、私が受けたショックをどう言い表したらよいか。—長崎には、一九四五年八月九日午前一時〇二分で止まった時と、その時を起点とする一六年に及ぶ日の移ろいがあった」。長崎取材を語るときに東松さんがくりかえし話していることです。「止まった時」と「日の移ろい」、東松キーワードです。提出された東松さん撮影の「ナガサキ」の写真の数々は、この「二つの時」を鮮烈に結んでいたと言っているものでした。（この項につづく）

国連軍縮会議で 第五福竜丸事件を伝える 粕谷たか子



静岡市で開催された第24回国連軍縮会議の市民展示（1月27日～2月1日）で「第五福竜丸を伝える会」が写真展と英語・日本語による語りを行いました。第五福竜丸展示館から借用した写真と絵本「忘れないで～第五福竜丸ものがたり」を見せながら行いました。被爆者の会や生協など10団体による展示会場への来場者は2800人余で、静岡市が実施したアンケートへの回答者は900人だそうです。アンケートには「第五福竜丸ものがたり」の語りを評価して下さる方もいるとのこと、嬉しい限りです。

私が来場者と話したところ、「第五福竜丸事件のことは知らなかった。」「東京の展示館に保管されていることは初耳」という人がかなりいました。「この水爆実験はフランスがやったのかと思っていた」という人もいました。展示会場に来てくれた軍縮会議の海外代表は残念ながら少数でした。過密スケジュールのためでしょうか。

静岡での軍縮会議ということで、マスコミは「第五福竜丸を伝える会」に注目して、新聞、TVニュースでも取り上げられました。ビキニ被災60年の来年に向け、次世代にしっかり継承するために若者たちと共に新たな取り組みを行いたいと思っています。

会議終了後、ボニー・D・ジェンキンス米務省・脅威削減計画・特別代表、ヴィンセント・ニコ赤十字国際委員会・駐日事務所、シャロン・リグル国連アジア太平洋平和軍縮センター所長が「Lucky Dragon Story」を聞いてくれました。

マーシャルで暮らしたい 企画展関連トーク



開催中の企画展関連イベントとして、1月末にマーシャルから帰国したばかりの池谷千穂さんに、マーシャルでの生活やロンゲラップの人々の近況を伺いました。池谷さんが初めてマーシャルを訪れたのは2011年8月。第五福竜丸で漁労長をしていた見崎吉男さんに、同時に死の灰を浴び被ばくしたマーシャル諸島とその人々のことを見せたいという思いから始まった旅でした。その旅でマーシャルの人々や島の暮らしに魅了された池谷さんは、その後も2012年3月にマーシャルを訪れ多くの被ばく者と触れ合います。今回のイベントでは、昨年末から1月末にかけての池谷さんの3度目のマーシャル訪問の報告を聞きました。

ロンゲラップの被ばく者はマーシャル諸島の各地に散らばり、池谷さんの訪れた首都マジュロにも多くの被ばく者が今も暮らしています。そうした一人ひとりとの出会いを通して、快活な口調で語られるマーシャルでの生活は被ばくという重い運命と闘うマーシャルの人々の暮らしを表しているようでした。

ボランティアの会総会・学習会

1月19日ボランティアの会総会が開催され、日常ガイドの確認と2013年度の年間企画等について話し合いがおこなわれました。つづく学習会では、協会評議員の桂川秀嗣・東邦大学名誉教授から、「移動する放射性物質～阿武隈川水系の放射能調査と二本松市における土壤汚染調査・空間線量マップ」と題し講演いただきました。この調査はNHK・ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染マップ」でも紹介されたもので、福島第一原発事故後の汚染状況を学びました。学習会に先立ち、健康太極拳指導士でもある桂川さんから呼吸法と体操のレクチャーがあり、終始リラックスした中での学習となりました。

第五福竜丸元乗組員・吉田勝雄さんが2月21日に逝去されました(享年83歳)。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

◇大石又七さんが講話を再開しました。1月末都内の中学校での講演以来、焼津での3・1ビキニデー集会などでもお話されています。3月5日には10か月ぶりに展示館で講演しました。

◇非常勤学芸員として2001年より展示館の教育普及・資料研究に従事していた市田真理さんが、本年1月より第五福竜丸平和協会事務局として勤務することになりました。専従スタッフとして、ビキニ水爆被災60年にむけてのプロジェクトに取り組みます。よろしくお願いします。

お花見平和のつどい2013

なくそう核兵器 つないでつないで
東京から平和を…のお知らせ

4月6日(土) 11:00～15:00
第五福竜丸展示館・展示館前広場

企画展「マーシャルは、いま」に因んだ講演と朗読パフォーマンスのほか、実行委員会団体の活動報告などを行います。どなたでも参加できます。